



# くすり博物館だより

〒483 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・058689-3111

第2号

〈スミソニアン研究所〉

## 国立歴史技術博物館収蔵品展オープン!!

「アメリカに見る医学の歴史——19世紀を中心として」



◀テーブル・カットの後、固い握手をかわす駐日アメリカ大使館・国家科学財団東京事務所長のエバート・アシュビー博士(左)と青木館長(右)、中央は内藤幸次エーザイ常務(財団理事長代理)

▼青木館長の説明に聞きいる人々



▼展示品の一部



去る10月13日、くすり博物館3階特別展示場において、「アメリカにおける医学の歴史——19世紀を中心として」と題した、アメリカ歴史技術博物館収蔵品展がオープンしました。

これは、昨年暮れ、青木くすり博物館長が渡米、同博物館を訪れた際に資料の交換展示をしようという話がまとまり、結実したものです。

同博物館の医薬学部門からは主に1800年代の資料165点が、今回日本に貸出されましたが、同館から海外に資料を貸出するのはこれが初めてまさに画期的な展示になりました。

13日のオープニングには、駐日アメリカ大使館・国家科学財団東京事務所長のエバート・アシュビー博士はじめ財団関係者や地元医師会、薬剤師会の代表、報道関係者など70余

名が出席、アシュビー博士と内藤幸次常務(内藤祐次財団理事長代理)によってテーブルがカットされました。

なお、くすり博物館からアメリカ・国立歴史技術博物館へ貸出す資料は、「はしか絵」や引札などの刷り物、版木、漆細工の薬箱類を中心に86点。

いずれも厳選された美しいもので、同館では医学部門とグラフィック・アート部門が協同して展示活動を進め来年1月下旬にはオープンの予定で、当館からの搬出作業はすでに終了しています。

▼にぎわう展示場



# ヨーロッパの博物館見てある記

くすり博物館長 **青木 允夫**

5月20日羽田を出発、モスコー経由でパリーに入り、ロンドン、ハイデルベルグ、アムステルダムなどで主として医薬系博物館を視察、6月5日帰国しました。

出発の日は成田空港開港の前日で国際線として羽田が利用される最後の日でした。表玄関が成田に移るといふ哀愁はどこにもなく、怪情報の乱れ飛ぶ羽田は、ものすごい混雑であり厳重な警戒下での出発でした。

## パストゥール展を日本で！

今回の渡欧の最大の目的は、パストゥール博物館の見学と、その資料の借用交渉でした。

パストゥール博物館は、国際的な拠金で創立されたパストゥール研究所の中にあります。管理責任者のH. Benichou 女史に暖かく迎えられ、ごあいさつもそこそこに早速博物館を見せていただきました。



▲Benichou 女史と筆者

酒石酸の旋光性に始まったパストゥールの研究は、ビールやワインの発酵、蚕の病気、自然発生説の否定、炭疽病、狂犬病ワクチンの発見と、次々に展開し、花開き実を結ばせてきました。

それらの関係資料が数多く展示されており、興味がつきません。

日本への借り出しの交渉は、大変スムーズに行われ、貸借に関する覚書を交換することができました。

フランスが生んだ偉大なる科学者パストゥールの資料は、大阪での万博の際、ほんの数点が展示されましたが、本格的なパストゥール展は、外国ではカナダについて、日本が第2回目とのことでした。

この展示は昭和54年春以降、東京大阪、そして川島のくすり博物館で開催することにしています。

## ルーブル博物館

最大の仕事を終えた私は、マロニエの花盛りのパリーを楽しむことができました。

まず最初にルーブル博物館へ行きました。ミロのビーナス、モナリザ、ミレーの晩鐘などの傑作を、ゆっくり間近に観賞できる、ということはずばらしいことでした。

絵画、彫刻もさることながら、ここで「ハンムラビ法典の碑」を見ることができたのは収穫でした、バビロン第1王朝の第6代目の王ハンム



◀ハンムラビ法典の石碑 (ルーブル)



▲狂犬と闘うジュピーユ (パストゥール研究所前)

ラビが制定した法典を刻んだ石碑です。四千年前のこの法典には医師や白内障に関する記述、骨折や疼痛性腫瘍の療法も記されているそうです。

## ドイツ薬事博物館

最も楽しみにしていたのは、ハイデルベルグ（ドイツ）の薬事博物館です。ライン河のほとりの古都ハイデルベルグは、小京都といったような感じでした。山あいの古都の中にこの博物館がありました。



▲ライン河畔のドイツ薬事博物館

ドイツ唯一の薬学博物館で、期待していた通り、すばらしい博物館でした。

再現された調剤室は格調の高い実に美事な展示でした。

ドイツの薬局は実験室を持っており、薬学の研究、薬品製造も行っていました。館内のこの一室には、実に数多くの器具が展示されており圧巻でした。その1つ「アレンピック」

を頂戴してきました。日本の「らんでき」の語原であるアレンピックは日本のと違って空冷式のガラス製レトルトです。帰国後、直ちにくすり博物館に展示しました。

### オランダの薬屋の看板

アムステルダムに5泊し、その昔日本との唯一の交易国、オランダを見て歩きました。

国立博物館には、日本特に長崎出島関係の資料が多く展示してありま

した。中国や東南アジア関係のもので、日本の資料として紹介されているものがあり気になりました。

歴史博物館で話に聞いていた薬屋のシンボル看板

がありました。18世紀のもので、今でも稀に地方で見ることができそうです。

かつての世界貿易の中心港で



あっただけに、度量衡関係の資料もかなり展示してありました。

今回の訪欧で強く感じたことは、立地条件・環境に恵まれた博物館が多かったということでした。故内藤豊次理事長が、ここ川島にくすり博物館を創設されたのも、博物館の環境を重視したからでしょう。

## 読書室に伝わる、仏蘭西のショメール動植物辞典

読書室・継孫

やまもと・もとを

18世紀のころ、わが国の博物学は、まだ本草学の盛んだったころで、小野蘭山先生が、江戸に下られたあと、山本世儒号亡羊(1778~1859)に引継がれ、京都の本草学で世に知られた、亡羊の講堂「読書室」に、この書物が、どのような経路で入ったのか、私は知らない。伝え聞くところ、独国の名医シーボルトが、来日のころ江戸参府の途上(1826頃)入洛のときシーボルトから贈られたものとも言われるが、確かな記録は、いまだ見当たらない。

偶々、先ごろ静岡の「葵文庫」に伝わるショメール百科辞典の翻訳本「厚生新編」が復刻され、今また読書室の書庫からショメールの動植物辞典が見つかったのは正に奇縁である。

読書室のショメール動植物辞典は

HANDBOEK CHOMEL アムステルダム1730~1734年版の蘭訳本全四巻で縦23cm・横巾14cm、八ツ折りのオクタボ版である。厚さは各巻とも約3cm凡そ560ページ、革背表紙で、表題の部分は朱色に色分けされ金文字、18世紀当時の装幀である。

本文はオランダ語、主として薬用植物と食用植物で、動物が僅かに掲載されている。主要なものには銅版の美しい原色図が見られる。18世紀ころの銅版の植物図、印刷技術もさることながら、その繊細な美しい図版に魅了される。薬用植物に可成り重点がおかれているところにこの書物の特色がある。例えば、サフラン(沮夫藍)、キショーブ(黄苳蒲)、ウイキョー(茴香)、ニンジン(沙参)、キニーネ(金雞動)、タマリンテ(羅晃子・酸豆)などである。

### ◇山本亡羊と読書室(京都市)

儒医山本亡羊(1778~1859)は文如上人の侍読であった父から読書室と呼ばれる一室を譲り受け、これを書齋とした。彼は小野蘭山に師事、本草をよくし、格致類編125巻、追巻2巻の大著を著した。その次男榕室も本草に通じ架蔵の本草書も多かった。



このタマリンテ(タマリンド)について亡羊の長男、沈三郎が天保15年7月に長崎の医学者、笠戸恕節に宛てた書簡に、セネーフル・タマリンテ・コッヒーの三点を依頼する手紙文がある。

最近の貴館の参考業務で、書簡の解説を求められた折り、私にお問い合わせのあった植物で、これまた不思議なご縁です。

ここに読書室ショメールの概要を述べて薬物史のご参考に資す。

(京都市 山本元夫氏投稿)

亡羊が自宅裏に開いた六百坪の薬草園は数百種にのぼる内外の植物を栽培したという。

くすり博物館付属薬用植物園には、シーボルトが京都を訪れた際に亡羊に贈ったといわれるイチジクの母樹からさし木繁殖させたものが植えられているが、まだ実を結ぶ程には成長していない。(編集者注)



◀山本亡羊読書室旧跡の碑

を間にした故内藤豊次理事長と筆者



### ◇パストゥール (1822~1895)

フランスが生んだ偉大な化学者であり、微生物学者である「パストゥール」展を、明春4月から東京、大阪そして当博物館で開催します。彼の業績を簡単に紹介しましょう。

結晶学：酒石酸に右旋性のものと、左旋性のものがあることを発見、今日の立体化学の基礎を築きました。



発酵：ビールやブドウ酒などができる発酵は微生物によることをつきとめ、さらに微生物には好気性のものと、嫌気性のものの2種類あることを確かめました。

自然発生説の否定：物が腐敗するのは、自然に腐るのではなく、微生物によるものとし、巧みな方法でこれを証明しました。これは、石炭酸消毒法のヒントとなり、手術による死亡率の低下をもたらしました。

パスツリゼーション：今日でもビールや牛乳などの殺菌に用いられている低温殺菌法(パスツリゼーション)を考案しました(1865)。

狂犬病ワクチンの創製：炭疽病ワクチンに引き続き、狂犬病ワクチンの創製に成功し、伝染病の征服に大きな

## とびっくす

### ▶アメリカ・国立歴史技術博物館へ資料搬出

交換展示のため、くすり博物館の資料86点を11月1日当館から搬出しました。

### ▶岐阜放送テレビの特番で紹介さる

「GBS カメラルポ・くすり博物館」と題した30分特別番組が7月3日夜と9日夕(再)放映されました。

この番組は、新展示「人類とともに4000年——セルフメディケーションと大衆薬」の開設を記念して企画されたもので、健康科学という観点から、新展示はもちろん、くすり博物館が総合的に紹介されました。

### ▶最近の資料貸出し

「日本の化学100年のあゆみ」=日本化学会東海支部主催=市立名古屋科学館において10月17日から29日まで。

「あしたをつくる健康展」=岐阜県・岐阜県民百歳運動推進協議会主催=岐阜高島屋において8月17日から22日まで。

貢献をしました。

1895年、パストゥールは77歳でその輝かしい生涯を終えました。明治28年のことでした。

その数年前、広く国際的に募られた基金でパリにパストゥール研究所が設立され、今日に至っています。

疾病の予防と治療に関する研究は高く評価され、ノーベル医学賞授賞者は8名を数えています。日本人でここに学んだ人も少なくありません。

## くすり博物館伝言板

### ◀新しい絵はがき▶

手頃でよい記念になると見学者からなじまれてきた絵はがきですが、さらに美しく改訂されました。12月には皆様にお目にかかります。

### ◀らんびき(江戸時代の蒸留器)の複製▶

くすり博物館で複製した錦絵「養生鑑」が好評ですが、今度は「らんびき」の複製ができました。高さ28cmと少し小ぶりの美濃焼で、書斎などに飾って楽しんでいただくのにぴったりです。

### ◀新着フィルム▶

16%カラー映画「性のめざめI・II」各23分

### ▶来館者10万人を突破

7月13日、一宮市教委・社会教育課の一行が見学に訪れました。当日は数組の団体でごったがえしましたが、みごと10万人めの幸運を射止めたのは、一宮市結婚相談所の秋田さん(62)。前後賞は同教育委員会の中村さんと熊沢さん。

青木館長から、当館建築のシンボルともいえる合掌造りをみごとに彫り抜いた一位細工の置物ほか盛りだくさんの記念品を手渡され、思わずニッコリ。



▲笑顔ニッコリ10万人めの来館者

なお、当館の来館者数は秋の遠足シーズンとも相まってウナギのぼり。10月末で105,378人。観光バスが続々と繰り込んで来る日が多く、汗だくで受けながら嬉しい悲鳴の毎日です。10月は1日平均100人でした。

くすり博物館 9:00~16:00開館(毎月曜日・年末年始 休館) ●お問い合わせは最寄りのエーザイ支店・連絡所に